

# 大陸に渡った シビルエンジニア



外務省 在瀋陽日本国総領事館  
領事 菊田 悦二

中国東北地方の中心都市「瀋陽」に着任して1年が経過し、オリンピックイヤーの夏を迎えました。

ここ瀋陽市は北京五輪のサッカー会場のひとつとなっており、昨年落成した「瀋陽オリンピックスタジアム」では男女合わせて12試合が行われます。サッカー日本男子代表は当会場で予選グループ最終戦を戦うことになり、瀋陽に日本中から熱い視線が向けられることと思います。

## 1. そもそも「瀋陽」って？

歴史好きな方なら、「瀋陽」よりも「満洲の奉天」と言った方が馴染みがあるかもしれません。日露戦争では大陸での最終激戦地、そして柳条湖事件（満州事変）や張作霖爆殺事件の現場となった場所です。

瀋陽駅（旧奉天駅）や遼寧賓館（旧大和ホテル）など戦前に建設された建造物も数多く現存し、今でも現役で利用されています。2009年からNHKで放映が予定されている日清・日露戦争を題材とした司馬遼太郎原作のドラマ「坂の上の雲」ではここ瀋陽（奉天）も舞台として登場すると思われます。

さらに歴史をさかのぼると、17世紀に清朝の最初の都が置かれたのもこの地で、世界遺産にも指定されている「瀋陽故宮」や「昭陵（北陵）」は瀋陽観光の定番コースになっています。

「瀋陽」の名前が日本で一躍有名になったのは、おそらく2002年に発生したいわゆる「瀋陽事件」の時のことだと思いますが、オリンピックを機に明るい話題でも知名度が上がればと思います。



瀋陽オリンピックスタジアム

## 2. 瀋陽市と中国東北地方の概要

瀋陽市は中国東北三省(遼寧省、吉林省、黒竜江省)のひとつ遼寧省の省都で、三省の政治・行政の中心都市です。瀋陽市だけで北海道の1.2倍以上の人口(約700万人)を持ち、三省全体では日本の85%の人口(約1.1億人)と、実に2倍の面積(約79万km<sup>2</sup>)を持っています。また瀋陽市と札幌市、黒竜江省と北海道、同省のハルビン市と旭川市がそれぞれ友好都市関係にあります。

東北地方には約5,500人の日本人が生活し、約1,000社の日系企業が進出していますが、このうち約8割が最南端の港町・大連市に集中しています。日本文化の影響も感じる瀋陽や長春(吉林省)に対してハルビン市ではロシア文化を色濃く感じ、港町の大連にはその両方があります。

大陸性気候のため寒暖の差が激しく、「春と秋が短い」と言われ、夏から冬、冬から夏への変化はあっという間です。瀋陽では夏の最高気温は30度以上、冬の最低気温は零下30度前後です。湿度が低いため夏でもあまり蒸し暑くないところは北海道に似ていますが、冬場の乾燥はとても厳しく、家庭では加湿器は必需品となります。去年の冬は私はハンドクリームも必需品になりました。

東北地方の産業は原油や石炭といった天然資源を背景とした重化学工業が発達していますが、外資を導入して経済発展を遂げた上海や広州などの沿海都市と比べると取り残され感が否めなく、近年は2003

年に国家が策定した「東北振興政策」に沿って各種産業を振興しており、特にIT分野には力を入れています。また近年、ロシアを経由する「日本海ルート」(主に新潟からアクセス)での貿易も行われており、これの定期化を期待する動きもあります。

また東北地方は中国国内でも教育水準が高いと言われており、日本語教育も盛んな地方です。日本留学の人気も高く、現在日本で学んでいる約7万人の中国人留学生のうち、東北地方出身者は半分以上を占めています。特にこの地方に多い朝鮮族やモンゴル族の学校では歴史的な背景もあって古くから日本語を第一外国語として中学校(時に小学校)から教えていることも多く、日本語専攻でなくても日本語が堪能な学生も少なくないなど、日本語人材またはトリリンガル(日中朝or日中蒙)な人材も豊富です。

## 3. 見て聞いて感じた中国

私が実際に自分の目で見て、話を聞いて、感じた中国は「平均が意味を成さない世界」です。つまり、日本では想像もできなかったような桁違いの格差社会だということです。

瀋陽に来て道路上を眺めてまず驚いたのは、高級外車の多さです。ベンツやBMWのハイエンドグレードが珍しくもないぐらいに走っていて、アウディが大衆車に思えるほどです。しかしその超高級車の隣を三輪トラックが走っていたり、耕耘機が荷車を引いて走っていたり、さらにはロバが馬車を引いていたりと、同時代とは思えない光景が目前の路上にすら混在しています。

列車の車窓からは馬に鋤(すき)を引かせて畑を耕している農民の姿や、手作業の田植え風景を目にし、トラクターなどの農業機械を利用している農民はごく稀です。

さらに内陸地方へ行くと、レンガ造りはまだ立派な方で、土を固めて作ったような家も珍しくありません。上水道すら整備されておらず、地域で唯一の医療施設にあるのは聴診器と血圧計と体温計のみというの



中国東北三省と各都市の位置図

もよくある話です。

中国には「日本人の平均所得以上の人が日本の人口以上いる」と言われており、中には度肝を抜くような「超大金持ち」も大勢いる一方で、医療や教育、社会インフラなどの基本的な社会サービスすら十分に受けられない人々がどれだけいるのかは想像もつきません。

ですから、“足して13億で割った” 平均値では中国の姿は語れないのだと痛感しました。

#### 4. 東北地方の都市間交通網

「高速道路が年間5,000km供用している」と言われる中国ですが、東北地方では遼東半島の大連から黒竜江省ハルビンに至る縦のライン（約950km）と各省の中心都市（瀋陽、長春、ハルビン）を中心とする放射状のルートにおいて鉄道網、高速道路網が発達し、特に昨年4月に運行を開始した最高時速250km/hの高速列車「和諧号」が北京—瀋陽—ハルビン間を結び、瀋陽—北京間（約800km）は約4時間（1日10便）で結ばれるようになり、さらに大連までの延伸が待たれているところです。しかしこれらの高速列車が導入されているのは一部の主要路線のみで、大部分の地域はまだこれらの恩恵とは無縁の位置にあります。

幹線ルートの鉄道や高速道路は大陸らしくほとんど一直線でトンネルなどひとつもありませんが、冬

期間では工期が制約されたり、温暖な地域よりも工事費がかさむなど、寒冷地ならではの問題点は北海道と共通のようです。また吉林省西部を高速道路で移動した際、道路の両側が延々と緑化されていた（防雪林か？）のは印象的でした。

#### 5. 瀋陽市内の交通事情

20年ほど前には4車線以上の道路が数えるほどであったという瀋陽市内では、近年急速に再開発と道路の拡張整備が進められてきています。現在は市内の主要な幹線道路は片側4、5車線の容量で、市街部外縁には高架化された環状道路が整備され、空港へは市中心部から高速道路利用で30分程度と良好な道路環境が整っていると思います。市民の足としては路線バス（運賃1元＝約15円）とタクシー（初乗り8元）がありますが、瀋陽をはじめとする東北地方の各都市にはいずれも地下鉄が無い（長春には軽軌道があります）ため、当然ながら「自動車（道路）偏重」の感は拭えません。

最近の中国ではコンパクトカーの人气が高まっており、つまり一部の大金持ちだけでなく中流層が自動車を保有し始めたことを表現しています。「1日に自動車が千台増える」と言われる北京ほどではないにせよ、瀋陽市でも新車登録は1日当たり300台以上と言われ、渋滞や大気汚染といった問題も軽視できなくなりつつあります。

歩行者空間に目を向けると、交差点でも切り下げの無い歩道や、歩道を走行しなければ駐車できない駐車場、さらには歩道に堂々と白線を引いてある駐車スペースなど、極めて「人に優しくない」光景を目にします。こういった部分を見ると、やはりまだ「発展途上」なのだなと実感しますが、同様にかつての日本も産業優先、発展優先で人が置き去りにされていた経緯を考えると、逆に今の日本でもまだまだ足りない部分があるの



高速列車「和諧号」

ではないかと想像します。

現在の瀋陽市内では大規模な道路改良工事は見られず、市内の幹線道路網整備は一段落した感じで、東北三省で初めてとなる地下鉄の建設も遅ればせながら進められており（2009年末より順次開通予定）、瀋陽の都市内交通網整備も新たな段階を迎えていると言えます。

五輪の開催により北京の渋滞や大気汚染の問題が重視され、国家が環境政策などに否が応でも重点を置くことになったのは、開発途上の東北地方には幸運だったように思います。事態が深刻化する前に対策が講じられ（命じられ?）、また北京などのノウハウを活用できる可能性もあるからです。

次はぜひ便利なだけでなく、人と環境にも優しい街を目指して欲しいと願います。

## 6. 最後に「広報文化班」とは?

最後に瀋陽での私の仕事について触れさせて頂きたいと思います。私が勤務する在瀋陽日本国総領事館では現在18人の日本人と22人の中国人スタッフが働いており、大連市（別途出張駐在官事務所あり）を除く東北三省を管轄しています。ここで私は「広報文化班」という仕事をしており、自己紹介するときには「文化領事」と名乗ります。

「どんな仕事?」と聞かれてもなかなか簡潔に説明することができなかつたのですが、最近「これ

だ!」と思うフレーズに出会いました。それは「理解なくして信頼なし」という、胡錦濤主席訪日の際の共同記者会見における福田総理のご発言の中の1フレーズです。

中華人民共和国建国の歴史は「抗日戦争」を抜きにしては語ることはできませんので、全ての国民は学校教育でかつての戦争の経緯を詳細に教え込まれています。そのため未だに日本に対して「軍国主義」「帝国主義」という印象を持ったままの方々も大勢います。

現代の実際の日本の姿、日本人の姿が理解されると、こういった誤解も解けるものと思われれます。理解してもらうためにはまず知ってもらうこと、知ってもらうためにはまず興味を持ってもらうこと、そのためには…と戦略を練って実行することが瀋陽での私の仕事です。

現地の日本人から「菊田さんの元々の仕事と今の仕事は一体どんな関係があるんですか」とか、他国の外交官から「日本では国土交通省で文化の仕事をしているのか」などと真剣かつ不思議そうに尋ねられるのは当初はとても辛かったのですが、今ではもう慣れました（開き直り?）。

これも広い意味での「社会づくり」ですので、土木屋（シビルエンジニア）としても少しでも自分に磨きをかけられるように、残りの任期を精一杯頑張りたいと思います。



世界遺産「瀋陽故宮」